

西洋文献における修験道研究の観点

レギナ・ヒューブナー*

はじめに

このノートは西洋の言語で書かれた修験道の文献についての概略である。欧米における修験道についての研究の現状を概観し、様々な一般的な研究、調査、論文等をいくつかの分野に分けて分析する試みである。問題関心は西洋文献における修験道の取り扱われた方を見てゆくことにあるが、どのような文献を取り上げて、分析してゆくかを絞る必要があった。それで、ここではまず修験道に直接関係する書籍、論文、翻訳のみを取り上げ、道教、仏教、神道、山岳信仰等の観点から修験道の研究に役立つと思われるものの、直接には修験道を対象としない文献は省くことにした（例えば Rotermund の『呪い歌』Hamburg 1973）。

様々な文献は以下のように取り扱った。まず、西洋の言語で書かれた修験道についての主要研究書は全部で五冊である。これらの本については研究の方法と目的、そして文献の点について詳細に注釈し、その他の論文は内容を要約した。するとその試みの副産物として欧州の日本学史の概要が浮かび上がってきた。日本学は、エキゾチックな遠い日本という対象を説明するような体験者の報告に始まり、現在では、科学的な分析による学術論文に至っている。

ここでは、欧米の研究者達が修験道についてどれほどの知識をもっているかということを紹介することにある。それは、西洋の修験道研究者がどの論文を重要視しているかということが問題なのではなく、これらの研究者が修験道の中で何が大切だと考えているかを明らかにしたい。すなわち研究者が欧米の読者に何を言いたいのか、どこに

※筑波大学大学院歴史・人類学研究科

重点を置いているかをはっきりさせたいと思っている。その過程で欧米の研究者と日本の研究者の視点の相違が判明するではないか、と考える。

修験道についての西洋の言語で書かれた文献をすべて記録するつもりだったが、“failure to mention a work does not necessarily imply lack of esteem, nor does mention of a work necessarily imply unreserved agreement.” (in : Anna Seidel, “Chronicle of Taoist Studies in the West 1950-1990”, *Cahiers d'Extreme Asie* 5 (1989-90) : 224.)

1. 初期の記述

a) イエズス会士の手紙

山伏についての最も早い報告となったのは宣教師の手紙であった。これらの自筆原稿はイエズス会が所有することになっている (HB Handschriftenband)。翻訳で要約したテキストとしては、Cysat (1585)・Coleridge (1871)・Haas (1902)・Schurhammer (1922/1923/1929) がある。(参考文献参照)

宣教師達は山伏についてどんな印象を持っていたか。彼らは、例えば修験道という言葉、そして修験道そのものの内容も知らないために、それらの手紙を見るとキリスト教的な考え方や語彙を使って、山伏のことを描写している。

グスマン・ルイス・デ (Guzman, Luis de 1543-1605 ; スペインのイエズス会宣教師) は改宗した山伏の報告から大峰巡礼について細部にわたる叙述を遺した。ここでその一部を訳してみたい。

この宗派の開祖達が宗員 (member of the sect) に遺したことの一つは巡礼であった。彼等は特殊な寺院で悪魔に祈るためにこれを年に二回行

なった。この巡礼については、既に七回行なったことがあり神の慈悲によってキリスト教徒となった僧侶が語ってくれたが、いかにも珍しく奇妙なことなのでここに記したい。(Schurhammer 1922, 54)

『日本の異教徒達が信じている誤謬の体系』(1557)の中に次の文がある。

日本にあるもう一つの宗派の名前は『悪魔の宗教』である。この宗に自己の意思で従う者は『Yamambuxis』と呼ばれる。(Schurhammer 1922, 74)

ヴィレラ・ガスパル (Vilela, Gaspar 1525-72; ポルトガルのイエズス会宣教師) が1557年10月28日に平戸から宣教師の同僚に書き送っている手紙には、

聖人の階級に到るために山伏は小舟で海に漕ぎ出し、投身自殺をする。(Schurhammer 1922, 77) とある。

又、フロイス・ルイス (Frois, Luis 1532?-97; ポルトガルのイエズス会宣教師) が1565年2月20日、都から宣教師の同僚に報告したことの中には次のような文がある。

贖罪が済むと、彼等は白い総を頸に掛け、つむ毛の上だけに黒くて小さい帽子を被る。これが山伏の装束だ。(Schurhammer 1922, 75) (総は結袷装のことで黒い帽子は頭巾である。)

その他にシュールハマーの論文の記述を要約すると、山伏は悪魔自身を崇拜し、その僕である。彼等は悪魔と同盟を結び、悪魔は彼等を弟子のように扱ふ。故に彼等は悪魔から本当のあるいは上辺だけの超自然的な知識や力を授かる。(Schurhammer 1922, 60)

b) 研究旅行者の報告

ケンプファー・エンゲルベルト (Kaempfer, Engelbert 1651-1716; 独研究旅行者) は『日本の歴史』の中で (Kaempfer 1906, 43-56; 341-2) 山伏ということについて当時の教団の実状、魔法、習慣、服装、階級等を一番詳細に描写している。

もう一つの、'托鉢宗教団'は通称『Jammabos』と呼ばれている。これは山の司祭の意であり言

い換えると『Jammabus』、これは山の軍人の意である。彼等がそう呼ばれたのは、常に刀と剣で武装していたからである。(Kaempfer 1906, 341)

上に述べたように、ケンプファーの『日本の歴史』は日本の「隠者の教団」についての最古の詳しい欧州の報告であり、19世紀の後半に至るまで、後の研究にとってほぼ唯一の史料となった。

ケンプファーと宣教師らの報告を要約すれば、彼等が述べているのは巡礼とその準備、修行所への旅、様々な苦行とそれにかかる時間、苦行中の幻覚、修験道への加入、称号と僧位の贈与に関する儀式等についてである。山伏の主な活動は病いを癒すこと、失ったあるいは盗まれたものを見付け出すこと、夢占い、「指を折り曲げ」(印を結んで)悪魔を呼ぶこと、彼等は神々を支配し、不思議な力を持っているということである。(Schurhammer 1922, 59-63)

ツンベルグ (Thunberg, C. P. 1743-1828; スウェーデンの植物学者; Thunberg 1796) の旅行報告によれば、山伏は難しく無用な生活をしている。ツンベルグは山伏の外観にも論及し、彼等が持つ術と古い能力からヨーロッパ北部のジプシーと比較している。日本に関しての論文の部分は『ツンベルグ日本日記』(山田珠樹譯註。東京、駿南社 1928; 異国叢書4)に翻訳されている。

シーボルト (Siebold, P. F. 1796-1866; 独医師ならびに自然科学者) も『ニッポン日本国記述の記録』(Siebold 1897)の中で僅かながら山伏のことに痘瘡と関連して触れている。(Siebold 1897, 81)

2. 宗教史の中の記述

西洋の言語で書かれた日本宗教史の中では修験道の現象は付随的にしか触れられない。以下の文献は基礎文献として上げたもので全てを網羅してはいないが、日本の宗教史が西洋に紹介され始めた当時、それらの文献の中でどのように修験道が扱われていたのか、簡単に見てみることにする。

山伏のことをごく一般的に言及するのは姉崎正

治の『日本宗教の歴史』(Anesaki 1930, 139-40, 233-4)である。

エリオットは『日本の仏教』の中で神仏混淆において山伏が主要な役割を果たしたと考えている。(Eliot 1935)。

グンダートは『日本の宗教史』の中で奈良仏教における道教の影響を指摘している。そしてこれは役行者伝説にも反映していると述べている。(Gundert 1943; 37, 78)

北川の『日本歴史の中の宗教』では庶民の間においての山伏の地位とその修行所描写がなされている。(Kitagawa 1966; 107, 109)

3. 修験道の世界についての概論及び歴史的叙述

シュールハマーの「山伏」という論文は山伏についてのイエズス会宣教師の報告とケンパーの記述の分析である。(上記参照; Schurhammer 1922)

カサルの「山伏」(Casal 1965)は修験道史の概論と言われているが、どのような資料を使ったかがあいまいなため、欧米の参考文献の引用書としてしか利用できない。この論文は1959年初めに書かれたが、1965年になってカサル氏の遺稿から整理され出版された。

ロテルムンドは、修験道について西洋の言語での最古の科学的研究書はレノンドーの書物であると書いている。ここでそのレノンドーの『修験道』(Renondeau 1965)という書物について述べた。

方法: 村上俊雄の『修験道の発達』(名著出版1943)から多くの部分を翻訳している。この本の大意は修験道史の概要である。

内容: 修験道の形成、明治時代までの山伏の歴史、教理の大意と儀式に関する概略。

次にあげるのはロテルムンドの『山伏』という博士論文である。彼はその中で中世の山伏について説明している。(Rotermund 1968)

方法: 文学的資料と歴史的資料に基づき、平安時代と中世の修験道を描写している。

研究の目的: 中世山伏の生活を解釈することである。それは山伏の理想形を創造するのではなく、彼等の宗教、世俗的有り方、行動方式を描写することにある。つまり、儀式と教理の宗教伝統の問題には立ち入っていない。

文献は軍記物語、鎌倉・室町時代の説話、御伽草子、山伏狂言等を使っている。

ロテルムンドはまた山伏の生活についてドイツ語で「日本九峯修行日記」という論文を書き、同じテーマでフランス語でも本を書いている。日本語では『日本九峯修行日記』を通して見た江戸後期の神道と修験道』を小論文として発表している(『神道の展開』。講座神道第二巻, 1991, 242-251)。

方法: 野田泉光院という大先達の日記の分析によって、連続六年間の巡礼の描写をしている。野田泉光院は1812年に出発し、旅行の目的は地方で修験道寺院の実態について調べることであった。大先達の日記は1934年偶然に見えられ、1935年に初めて出版された。

研究の目的: ロテルムンドは野田の一日の経過の概略を書くことによって、山伏のいろいろな仕事、特に講釈師としての彼等の役割を解説する。ロテルムンドはその中から実例的なくつかの状況を取り出して野田の行為などを分析評価し、江戸時代の人間の生活と思想に触れようとする。

それに対してエーガーはその博士論文『修験道社会的な解明』で修験道について著わしているがこの著書に関してはまだ入手できていない。(Eger 1979)

4. 伝記

修験道の開祖といわれる役行者については英・独語での三つの小論文がある。

一つはロテルムンドの書いた「役行者伝説」であって、『続日本記』、『日本霊異記』、『今昔物語』、『元亨釈書』等に基づいて役行者の生活が再構成

されている。(Rotermund 1965)

エルハルトも役行者の伝説の問題を「修験道」の中で扱っている。彼は役行者の伝統についてだけでなく、役行者の伝統を例にして日本の宗教に密教の影響があるということを明らかにしようとしていた。(Earhart 1965^a)

『本朝神仙伝』の中で大江匡房の書いた役行者の伝説的な伝記は、ポナーによって翻訳されている。(Bohner 1957)

5. 年中行事並びに儀式

エルハルトは羽黒派修験道での四季の行事の分析によって修験道という日本の宗教的な現象を紹介しようとしている。(Earhart 1965^b)

又、修験道の中で行なわれた処刑の方法についてエルハルトは「石子詰め」という小論文で言及している。(Earhart 1966)

6. 信 仰

山岳信仰についての論文はエルハルトの『羽黒派修験道の宗教的な研究』である。(Earhart 1970) 方法は実地調査の研究である。

研究の目的：論文の中心は羽黒派修験道を調査することで、これは宗教民俗学の観点で論議されている。著者は、山岳信仰を事例として、日本宗教の本質を解明しようとしている。論文では役行者の関連をも扱っている。文献：主に日本語の参考文献を使用し、文献の出典はあまり指摘されていない。

ローウェルは「Occult Japan」と「Esoteric Shinto」についての経験報告をしている。彼は神秘主義、シャーマニズム、そして魔術の世界について紹介している。(Lowell 1893; 1895) その中で彼は1891年8月、御岳登山に際して偶然に出会った「エソテリックな現象」を、(これは山岳信仰であり「神秘的な憑き物」、入神状態であり、不思議なことである) 詳しく描写している。

この他に神秘的なことについて欧米に報告している研究者は堀一郎である。彼は真言派修験道でのミイラ信仰の中で、修験道神秘主義の特徴と、

この制度上の理論的宗教的な背景を論議している。(Hori 1962)

ブラッカーはシャーマニズムの分野から修験道の世界に近づいてゆく。『あずさ弓』の中で苦行者、即ち山伏のイニシエーションと象徴的な霊の旅を描写している。イモース等に対してブラッカーは山伏が8、9世紀の聖の直系の子孫であると書いている。彼女の考えはここで掘の「聖の概念について」(Hori 1958) に結びついている。掘の論文はこの聖組織の展開と特徴を描くことによって、奈良・平安時代の宗教・政治的な生活と生き方、つまり当時の山伏の及ぼした影響とその活動を解説している(この論文は彼の1966年出版された『Folk Religion in Japan』の一部になった)。

ブラッカーに戻って彼女のもう一つのイニシエーションを中心とした論文は「修験道の中のイニシエーション」である(Blacker 1965)。上記の論文ように山伏達のイニシエーションの仕方が描写されている。

7. 芸 術

世阿弥(1364?-1443)は役行者と一言主の伝説を『葛城』という能の中で自由に物語った。この作品はドレーガーとエルリングハーゲンによって独語に翻訳された。(Draeger, Erlinghagen 1942)

山伏神楽のことについてはイモースによる「山伏舞楽儀式」という論文がある。(Imoos 1968) このような舞楽はイモースによると山伏が毘盧遮那仏との統一を自覚する方法であって、今でも岩手県で上演されているという。

アベルブーフの博士論文においても山伏神楽が扱われている。この論文で説明されている山伏神楽はダケ派の神楽を中心として、東北で上演されているものである。(Averbuch 1990)

まとめにかえて

今まで見てきたように、欧米では修験道という分野についてはたくさんの小論文がある。これらの小論文は修験道というテーマを様々な視点から

明らかにし、あるいはこの広い範囲の中の小部分を取り出して検討している。このテーマを要約して、あるいは概論として詳細に扱っている書籍は4冊のみである。(Earhart, Renondeau, Roter-mund, Eger を省く)。

山伏は人間の存在の中で多くの側面、つまり宗教的、社会的、民俗的等の観点に触れているので、欧米での研究の中でまだ取り扱われていないところが多いのである。例えば山伏と垂迹芸能の関係、民間医療における山伏の役割、山伏の装束や儀式を叙述し論議している修験道の教義書の内容などはまだ研究されていない。

欧米文献で目立つのは山岳信仰における修験道研究の占める割合がごく僅かであるということである。それぞれの修験道研究をみると、日本における地域研究といったものが、エルハルトを除いてほとんどなされていない。

修験道については欧米でまだまだ知られていないことが多い。だからこそ、これからこの分野での研究が進められることが望まれている。

参 考 文 献

- Anesaki, Masaharu (1930) : *History of Japanese Religion*. London : Kegan.
- Averbuch, Irit (1990) : *Yamabushi Kagura : A Study of a Traditional Ritual Dance in Contemporary Japan*. (Ph. D. in Study of Religion) Harvard.
- Bohner, Hermann (1957) : "Honchō-shinsen-den", *Monumenta Nipponica* 13 : 129-52.
- Blacker, Carmen (1965) : "Initiation in Shugendō. The Passage through the ten Stages of Existence", *Initiation. Contributions to the theme of the Study-Conference of the International Association of the History of Religion*. Leiden, 96-111.
- Blacker, Carmen (1975) : *The Catalpa Bow. A study of shamanistic practices in Japan*. London : Allen & Unwin
- Casal, U. A. (1965) : "The Yamabushi", *MOAG* 46 : 1-45.
- Coleridge (1871) : *Life and Letters of St. F. Xavier II*. London.
- Cysat, Renward (1585) : *Wahrhaftiger Bericht von den Neuerfundenen Japponischen Inseln und Koenigreichen auch von anderen zuvor unbekanntem Indianischen Landen. Darinn der heilige Christliche Glaub wunderbarlich zunimpt und auffwaechst*. Freyburg : Abraham Gemperlin. (Siehe auch : NOAG 98 (1965) : 45-56.)
- Draeger, Walter ; Erlinghagen, Helmut (1942) : "Nō Kazuraki", *Monumenta Nipponica* 5/2 : 437-65.
- Earhart, H. Byron (1965)^a : "Shugendō, the Tradition of En no Gyōja and Mikkyō Influence", *Studies of Esoteric Buddhism and Tantrism*. Kōyasan 297-317.
- Earhart, H. Byron (1965)^b : "Four Ritual Periods of Haguro Shugendō in North-Eastern Japan", *History of Religions* 5/1 : 93-113.
- Earhart, H. Byron (1966) : "Ishikozume : Ritual Execution in Japanese Religion Especially in Shugendō", *Numen* 13/2 : 116-27.
- Earhart, H. Byron (1970) : *A religious study of the Mount Haguro sect of Shugendō : an example of Japanese mountain religion*. Tōkyō : Sophia Univ.
- Eger, Max (1979?) : *Shugendō. Eine soziologische Betrachtung*. Wien.
- Gundert, Wilhelm (1943) : *Japanische Religionsgeschichte. Die Religionen der Japaner und Koreaner in geschichtlichem Abriss dargestellt*. Stuttgart.
- Haas, H. (1902) : *Geschichte des Christentums in Japan I*. Tōkyō.
- Hori, Ichirō (1958) : "On the Concept of Hijiri

- (Holy Man) ", *Numen* 5/2 : 128-60 ; 5/3 : 199-232.
- Hori, Ichirō (1962) : "Self mummified Buddhas in Japan. An Aspect of the Shugendō ("Mountain Asceticism") sect" , *History of Religion* 1/2 : 222-42.
- Hori, Ichirō (1968) : *Folk religion in Japan : continuity and change*. Joseph M. Kitagawa, Alan L. Miller (Hg.). Chicago: University of Chicago Press.
- Immoos, Thomas (1968) : *Das Tanzritual der Yamabushi und Ein Ritual der Wiedergeburt in den Yamabushi-Kagura*. NOAG Tōkyō.
- Kaempfer, Engelbert (1906) : *The History of Japan. Together with a Description of the Kingdom of Siam, 1690-1692*. 3 Bde., Glasgow.
- Lowell, Percival (1893/4) : "Esoteric Shintō" , *Transactions of the Asiatic Society of Japan* 21 : 106-35, 152-97, 241-70 ; 22 : 1-26.
- Lowell, Percival (1895) : *Occult Japan, or the Way of the Gods : An Esoteric Study of Japanese Personality and Possession*. Boston.
- Renondeau, Gaston (1965) : *Le Shugendō. Histoire, doctrine et rites des anachorètes dits yamabushi*. Cahiers de la Société Asiatique 18. Paris.
- Rotermund, Hartmut O. (1965) : "Die Legende des En no Gyōja" , *Oriens Extremus* 12 : 221-41.
- Rotermund, Hartmut O. (1968) : *Die Yamabushi. Aspekte ihres Glaubens, Lebens und ihrer sozialen Funktion im japanischen Mittelalter*. (Monographien zur Völkerkunde 5.) Hamburg.
- Rotermund, Hartmut O. (1979) : "Notizen zur gesellschaftlichen Stellung pilgernder Yamabushi der späten Edozeit" , *Oriens Extremus* 26-1/2 : 133-51.
- Rotermund, Hartmut O. (1983) : *Pèlerinage aux neuf sommets. Carnet de route d'un religieux itinérant dans le Japon du XIX. siècle*. CNRS, Paris.
- Schurhammer, Georg (1922) : "Die Yamabushi, nach gedruckten und ungedruckten Berichten des 16. und 17. Jahrhunderts" , *Zeitschrift fuer Missionswissenschaft und Religionswissenschaft* 12 : 206-28.
- Schurhammer, Georg (1923) : *Shintō, der Weg der Goetter in Japan*. Bonn und Leipzig.
- Schurhammer, Georg (1929) : *Die Disputationen des P. Cosme de Torres S. J. mit den Buddhisten in Yamaguchi im Jahre 1551*. (Mitteilungen d. dtsh. Gesellsch. f. Natur- und Völkerkunde Ostasiens. Bd. 24, T 1. A.) Tōkyō.
- Siebold, Philip Franz von (1897) : *Nippon, Archiv zur Beschreibung von Japan*, 2 Bde. 2. Aufl. Wuerzburg und Leipzig.
- Thunberg C. P. (1796) : *Resanti Europa, Afrika, Asia foeraettlad aren 1770-1779*. Bibl. Nat., Paris. (Franz. Uebersetzg. : *Voyages de C. P. Thunberg, au Japon, par le cap de Bonne-Esperance, les isles de la sonde, et cetera*. Paris : Benoit Dandre, 1796) .